



TITLE:

# 古墳時代甲冑成立・展開期の基礎的研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

阪口, 英毅

---

CITATION:

阪口, 英毅. 古墳時代甲冑成立・展開期の基礎的研究. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13028>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	阪口 英毅
論文題目	古墳時代甲冑成立・展開期の基礎的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>古墳時代の社会は、権力者の墳墓に武器や武具が埋納される事例が多く認められることに示されるように、その規定要素の一つとして軍事力に大きな比重が認められる社会であったと考えられる。したがって、武器や武具は、その軍事的な重要性和そこから推測される政治的な重要性の故に、該期における社会の特質を把握し、考究していく上で有効な研究対象であるといえる。加えて甲冑は、実用武具としての性格に加えて、該期におけるもっとも大型の、かつもっとも複雑な構造をもつ鉄製品であることから、その構造に製作当時の最新技術が反映されていることが期待される。すなわち、古墳時代甲冑は、軍事的・政治的な重要性和技術的な先進性という二つの特性を備えた研究材料であるといえる。</p> <p>現在の甲冑研究の動向を、以下の4点にまとめる。① 甲冑出土古墳の検討から古墳時代のより高次の問題に迫ろうとする努力が積極的におこなわれている。② 朝鮮半島出土例・報告例がさらに増加し日本列島出土例との直接的な比較検討が試みられている。③ 付属具も含めて個別的な編年研究の精緻化が進んでいる。④ 資料整備・集成の更新が進み資料全体の把握が可能な状況がさらに整えられている。</p> <p>上述の状況にあって、優先的に検討すべき課題は、第一に甲冑の系譜論・型式論・編年論・製作工程論の総合化、第二に生産体制の具体相の解明であると考ええる。先述の動向①は、「甲冑を材料とした研究」として甲冑研究が古墳時代研究において一定の役割を果たしていく上で、きわめて重要な研究課題であると考えられる。ただし、これを着実に発展させていくためには、その基盤となる「甲冑を対象とした研究」としての系譜論・型式論・編年論・製作工程論の総合化が、先行して果たされるべきであろう。さらに、その成果を踏まえ、生産体制の具体相が「甲冑を材料とした研究」の第一歩として十分に検討される必要がある。</p> <p>甲冑の各装具や各形式はそれぞれ独立的に生産されていたのではなく、それらの間には相互の技術的連関が認められる。緻密な観察や検討を通じてその実相を明らかにすることにより、各論の蓄積が総合化され、動向②・③をより堅実に推進することができるであろう。このような手順を経ることによって、はじめて動向①が目指すような「甲冑を材料とする研究」の段階へと進むことができると考える。その第一歩として、本論では甲冑生産体制の具体相の解明を目指したい。そして、これらの研究を進める条件は、動向④によって整備されていると判断される。</p> <p>本論では、上述の課題に取り組むための前提的な作業として、まず考古資料として</p>			

の甲冑、副葬品としての甲冑をどのようなものとして認識・評価するのかという基本的な立場について、「表象」という視点から検討を加え、指針を得る〔第1章〕。その上で、古墳時代甲冑の総体について系譜論〔第2章〕・型式論・編年論〔第3章〕・製作工程論〔第4章〕を検討する。それぞれについて、可能な限り丹念に研究史をたどることを意識しつつ、現在の資料状況に即して私見を提示したい。これらを総合化するために、時間的・空間的に広範囲を扱う議論から検討をはじめ、次第に製品に密着した議論へと移行していく。前段での議論を前提とし、そこでの成果を踏襲して議論を進めていくことで、体系的に総合化していくことを目論む。これは、甲冑研究の現状を示すと同時に、筆者による甲冑研究の輪郭を示すものでもある。以上を第Ⅰ部とする。

第Ⅰ部で示した枠組の中でも、革綴短甲が生産された時期に焦点を絞り、型式学的検討を踏まえてその変遷を詳細にたどる。鉄製短甲の出現期（縦矧板革綴短甲）〔第5章〕、帯金式短甲成立への胎動期（方形板革綴短甲）〔第6章〕、帯金式短甲の成立・展開期（長方板革綴短甲・三角板革綴短甲）〔第7章〕に区分して、それぞれ「甲冑を対象とした研究」を推進する。以上を第Ⅱ部とする。

第Ⅱ部で論じた短甲の変遷とそれにまつわる諸相を踏まえ、甲冑の生産体制の具体相を追究し、その評価をおこなう。まず、鉄製甲冑生産の開始以来、生産体制にもっとも大きな変革が生じ、再編がなされたと考えられる鋳留技法導入期の諸問題を検討し、革綴短甲生産の終焉期の様相について整理する〔第8章〕。それを踏まえ、革綴短甲生産の開始期から終焉期までの生産体制の変遷をたどるとともに、それを技術的視点と意匠的視点の二つの視点から評価したい。最後に、革綴短甲生産の特質に論及し、総括とする〔終章〕。以上を第Ⅲ部とする。

## 第Ⅰ部 甲冑研究の枠組

「第1章 甲冑副葬の意義」では、考古学にとってなじみの薄い概念である「表象」という視角から、古墳時代人の心的表象に留意しつつ、甲冑および甲冑副葬について考察を試みた。その結果、それらは多様な「こと・もの」〔指示対象〕を表象していると考えられるが、それらの中でも古墳時代社会においては、甲冑は「武威」、甲冑副葬はその「解体」をとくに強調して表象しているものと考えた。副葬品としての甲冑について考察を進めるに際しては、この理解を念頭に置きつつ取り組むこととしたい。

また、考察の過程において甲冑研究の動向を検討し、「甲冑を対象とした研究」と「甲冑を材料とした研究」の二相を認め、前者を基礎として後者が推進されるべきことを指摘した。さらに、甲冑のライフサイクルにおける各場面に即した甲冑の性格を意識し、場面に応じた適切な研究方法をとるべきことを提言した。

本論では、「甲冑を材料とした研究」を推進する以前に「甲冑を対象とした研究」において解明すべき点がまだ多く残されているとの認識に立ち、まず「甲冑を対象とした研究」に資することを目的とする。具体的には、「ハイテク製品」・「一元的集中生産品」といった甲冑の性格を念頭に置きつつ、「製作の場面」に即して検討を進める。その際、「製作の場面」に即した出土状況の検討を望むことができない現状を踏まえ、遺物そのもの一すなわち製品としての甲冑—に焦点を絞りたい。

「第2章 系譜論」では、古墳時代甲冑の系譜を明らかにすることを目的に、基本構造と連接技法をおもな対象として、技術的な視点から検討を加えた。これを踏まえ、日本列島出土の甲冑全体を包括する分類体系を提示するとともに、各同一技術品群の系譜を整理した。また、形式の一例として「横矧板革綴短甲」を取り上げ、研究史上において混乱にいたる経緯を精査するとともに、現在の資料実態に基づき、この形式名称が指し示す資料内容を確定した。

これらの作業により、系譜という視点から甲冑研究の枠組を定め、本論でおもに取り扱う時期や形式へと論を進めるための基盤を構築した。

「第3章 型式論・編年論」では、古墳時代甲冑の総体を対象として、「型式」と「編年」をめぐる論点に焦点を絞り、研究の現状を概観した。多様な立場や方法による見解が相関しつつ複雑に展開していることを再確認するとともに、甲・冑・頸甲・鋊の4種に限定しながらも総合的な編年表を提示することで、現時点における研究の到達点を示した。

本論では、これを「型式」と「編年」の枠組とした上で、第Ⅱ部ではその中でもⅠ期からⅡ－2期にかけて消長する革綴短甲を取り上げ、その展開を論じる。

「第4章 製作工程論」では、甲冑製作工程の概要を整理し、各工程とそこで使用される製作技術、またその製作技術が観察される属性の対応関係を踏まえ、系譜論・型式論・編年論を深化する上で重視すべき属性について検討した。その結果、帯金革綴式甲冑については地板構成、帯金鋊留式甲冑については鋊頭径・鋊留数・鋊留位置、小札威甲については小札の穿孔配置・縦断面形を重視すべきとの認識を得た。これらの認識は、研究史上でも重視されてきた属性であり、本論ではその追認作業をおこなったに過ぎないが、製作工程の中での位置づけを検討することにより、なぜその属性に着目すべきであるのかを、より論理的に、より明瞭に示すことができたと考える。本章における成果を、第Ⅱ部における「甲冑を対象とした研究」の指針としていきたい。

本章まで、日本列島出土の甲冑全般を視野に入れつつ、系譜論・型式論・編年論・製作工程論の研究史と現状を整理するとともに、私見を加味して相互を連関させることによって、総合化を試みた。この作業はまた、現在における甲冑研究の枠組を提示することにもなったと考える。この枠組の中で、第Ⅱ部では革綴短甲を取り上げて

「甲冑を対象とした研究」を深める。

## 第Ⅱ部 革綴短甲生産の展開

「第5章 鉄製短甲の出現」では、日本列島における鉄製甲冑出現期の資料として重要な位置を占める、紫金山古墳出土武具についての既往の研究を振り返るとともに、近年の資料の増加を踏まえて、縦矧板革綴短甲について型式学的な検討を試みた。その結果、「多様性」の中にも単系列的な変遷を想定することも可能なことを示す一方で、小規模で試行錯誤的な生産状況を想定する意見を追認した。

その過程では、綴第1技法が朝鮮半島の縦長板甲にも使用されていることを確認したが、このことは古墳時代前期における日本列島出土の割付系甲冑の系譜や生産地の問題を考える上できわめて重要な事実である。現在の資料状況では、朝鮮半島から日本列島への技術的影響のもと、日本列島での生産を考えるのが妥当であろう。

また、新たに確認した綴第1'技法について若干の検討を試みた。技術的側面からはこの技法をあえて用いる合理的な理由はみいだせず、イレギュラーな存在と推定する。綴第1'技法も朝鮮半島の縦長板甲に使用されていることが明らかとなり、鉄製甲冑生産開始期における朝鮮半島と日本列島の技術交流を、より密接なものとして評価する必要性を示している。

「第6章 帯金式短甲の成立過程」では、帯金式短甲の成立、すなわち長方板革綴短甲の出現を、前代からの技術系譜を重視する視点から跡づけた。縦矧板革綴短甲・方形板革綴短甲は、研究史上において個性的・無規格的な側面が強調されることが多かったが、その地板形態・配置の変化に着目すると、長方板革綴短甲へと継続していく設計原理および組立工程の変化をより明瞭に看取しうる。

一方、帯金式短甲の成立を決定づけたフレームの創出は、方形板革綴短甲における段内結合の定着が技術的基盤となって実現したと考えられる。本章で参照した枠組や着目した属性は、先行研究によってすでに準備されていたものがほとんどであるが、視点を移して再吟味・再構成することにより、帯金式甲冑の成立の過程を、これまでよりも体系的・具体的に説明することができた。とくに、新たに出土した鞍岡山3号墳例から得られた知見によって、さらに具体的な跡づけが可能となり、先行論文以来の見解を微修正しつつ補強することができたと考える。

また、これによって、出現や変遷の過程で有機質製甲や朝鮮半島南部からの影響を受けつつも、古墳時代前期の日本列島において縦矧板革綴短甲・方形板革綴短甲の生産が一貫した技術系譜のもとでおこなわれたこと、それは続く中期に盛行する帯金式甲冑の生産への胎動とみなしうることを追認することともなった。

古墳時代中期の政権中枢が最高級の権威を付与して配布したと目される政治的器物たる帯金式甲冑は、前代からの技術系譜の上に、鍛造技術の発達を背景として、生産

性や機能性の向上を模索する中で自律的に創出されたものとする。

「第7章 帯金式革綴短甲の変遷と特質」では、短甲そのものの地板構成の変化によって、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲の変遷を跡づけ、両形式に注ぎ込まれた技術の評価からそれぞれの特色を導き出し、その生産時期や設計系統における関係を明らかにしようと試みた。その結果、両形式の変遷について明らかにし得たと考える。

また、本章で提示した両形式にみられる特質は、技術的視点によってのみ甲冑の変遷を考えようとしてきた従来の研究方向に再考の余地があることを示したと考えている。あくまでも技術的視点を検討の基本に置くのが常道であるが、技術の進化論的な変化だけが甲冑の変遷を規定しているのではないと考えられる。また、両形式にみられる特質の差が、そのまま両形式の製品としての性格差として認められるならば、そこから派生する問題は多岐にわたる。これらの点については、「甲冑を材料とした研究」における検討課題となろう。

### 第Ⅲ部 革綴短甲生産体制の評価

「第8章 鋳留技法導入期の評価」では、鋳留技法導入期をめぐる研究史を渉猟し、これまでに提示されてきた論点を四つに集約した。それぞれの論点について先学の見解の整理と吟味を試み、その蓄積の上に若干ながら新たに考察を継ぎ足した部分もある。要約するならば、以下のようになる。

鋳留技法導入期の時間幅は、須恵器型式のTK 73 型式併行期の中に収まり、その絶対年代は5世紀第2四半期でも前半頃と考えられる。鋳留技法をはじめとする新技術の系譜の淵源は、上記の時期に金官加耶地域を影響下においていたとされる新羅地域に求められる可能性がある。鋳留技法は、為政者の政治的意図のもと、外来系甲冑の生産を目的として渡来甲冑工人が組織されたことを契機に導入された。渡来工人を中心に外来系組織が編成される一方で、在来系組織にも技術指導者として渡来工人が配置され、在来系甲冑に新技術が導入されていったとみられる。日本列島への導入当初の鋳留技法は、あくまでも単位系甲冑のための連接技法であったが、割付系甲冑への使用が開始されると同時に、新たに生産の効率化に適した連接技法としての変容を始めた。鋳留技法導入期にみられる変形板甲冑は、甲冑の意匠性を重視し、そのバリエーションを拡大させる政治的意図のもと、新来の鋳留技法を使用し、鋳留製品の構造を取り入れながら、革綴甲冑生産の技術を駆使することにより生産された、在来工人主体の意匠性重視仕様の製品とみることができる。

「終章 革綴短甲生産の展開と特質」では、第Ⅰ部で示した甲冑研究の枠組のもと、第Ⅱ部および第8章で論じた革綴短甲の変遷とそれにまつわる諸相を踏まえ、革綴短甲生産の開始から終焉にいたるまでの生産体制の変遷をたどった。また、その画期について、技術および意匠という二つの視点から言及した。最後に、革綴短甲生産

の特質を次の二点にまとめる。第一は、前期後半以降、政権中枢の強力な関与によって管理され、段階的に拡充された点である。第二は、そうでありながらも複数の工人集団や工房といった生産単位をみいだしうるほどには生産体制が複雑化を遂げなかった点である。第一の点については、研究史上においても論じ尽くされてきた感のあることではあるが、「甲冑を対象とした研究」〔第1章〕を追究した結果として、あらためて強調しておきたい。

(論文審査の結果の要旨)

日本列島各地で築造された古墳には、被葬者にまつわるさまざまな副葬品が埋葬された。中でも鉄製の武器・武具は、当時の鉄製品製作技術の水準を示す重要な遺物である。また、それらが特定の古墳に集中的に埋納されたことは、古墳時代の軍事的・政治的特質を知るための重要な手がかりになると考えられてきた。本論文は、さまざまな鉄製武器・武具の中でも、大型かつ複雑な構造をもつ鉄製品である甲冑を主たる研究対象とする。論者は、これまでの甲冑をめぐるさまざまな研究を整理した上で、古墳時代の軍事的・政治的状況を復元するための「甲冑を材料とした研究」を進める前提条件として、系譜論・型式論・編年論・製作工程論を総合化し、具体的な生産体制を明らかにする「甲冑を対象とした研究」が必要であり、それらの研究には、いまだに不十分な部分が残っていると考ええる。そうした立場から、論者がこれまで進めてきた、革綴短甲の詳細な実測および構造復元作業の蓄積をもとにして、甲冑研究をめぐる問題点を整理・検討したのが本博士論文である。

第Ⅰ部「甲冑研究の枠組」においては、「甲冑のライフサイクル」における場面ごとの甲冑の性格の違いを考慮する中で「表象」という視点から甲冑副葬の意義を明確にし(第1章)、その上で、甲冑の系譜論(第2章)、型式論・編年論(第3章)、製作工程論(第4章)における問題点を整理し、それらに対する論者の見解が示された。系譜論においては、少なからずの混乱があった鉄板の連接技法(綴技法・鉚留技法・威技法)の定義と、その技術的意味および系譜関係が体系的に再整理された。このことにより、さまざまな構造・形態をもつ甲冑の系譜が明確に示された。また、型式の認定において混乱が続いてきた「横矧板革綴短甲」の実態を明らかにした。こうした系譜論に基づいて整理された古墳時代甲冑の型式分類および編年案は、今後、甲冑研究のみならず、古墳時代の研究において参照されることになるであろう。

さらに、これまでの研究史を踏まえて、代表的な甲冑である帯金式短甲と小札威甲について、その複雑な製作工程を整理し、甲冑研究において注目されてきた諸属性が、どの工程の変化によく対応しているのかについて検討がおこなわれた。その結果、帯金革綴式甲冑については地板構成、帯金鉚留式甲冑については鉚頭径・鉚留数・鉚留位置、小札威甲については、小札の穿孔配置・縦断面形を重視すべきことを明らかにした。こうした研究視角は、今後甲冑の検討を進める上で、大きな指針となるであろう。

第Ⅱ部「革綴短甲生産の展開」では、論者がこれまで個々の資料の図化・報告作業を積み重ねることにより、従来不明であった構造的特徴の復元について大きな成果を上げてきた、革綴短甲の出現と変遷過程についての、総括的な検討がおこなわれた。

まず第5章では、論者が再整理を進めてその実態を明らかにした紫金山古墳出土短甲の特徴と、大韓民国・福泉洞38号墳出土縦長板革綴板甲から得られた新たな知見をもとに、日本列島の前期古墳から出土した縦矧板革綴短甲は、朝鮮半島からの技術的影響の下、日本列島で生産された、という結論を導き出した。古墳時代前期における



甲冑の出自と系譜については大きく意見が分かれてきたが、今回の結論は、現状としてはもっとも妥当性があると考えられる。

第6章では、従来、「個性的」・「無規格的」であると評価されてきた方形板革綴短甲を、その地板形態・配置をめぐる諸様相を手がかりとして、その変遷過程を詳細に検討した。その結果、日本列島の限られた工房内において、縦矧板革綴短甲から方形板革綴短甲の製作・改良を経て、帯金式革綴短甲が成立したことを示した。

第7章では、地板配置の詳細な検討を進め、長方板革綴短甲をⅠa・b式、Ⅱa・b式、Ⅲa・b式に、等角系三角板革綴短甲をTⅠ～Ⅲ式に、鈍角系三角板革綴短甲をDⅠ～Ⅳ式に分類した。さらに鈍角系三角板革綴短甲については、長胴第一段地板構成の分類結果をもとに、DⅠ1～3式、DⅢ1～3式を設定した。これらの諸型式は、地板構成の詳細な比較検討を通して、その系譜および系譜間の並行関係が想定され、共伴遺物相および甲冑のセット関係の検証を通して、その妥当性が示された。以上の検討は、個々の資料に対する綿密な検討結果に基づいており、論者のいう「甲冑を材料とした研究」の、現状における到達点を示す研究であると評価したい。

第Ⅲ部「革綴短甲生産体制の評価」では、第Ⅱ部における革綴短甲の検討成果をもとに、鋳留技法から導入されることにより、甲冑生産におきた技術革新とその意味を再検討した。さらに、これまでの検討成果をもとに、革綴短甲は、政権中枢の強力な関与の下、少数の工人によって生産がなされたと考えられることが示された。

本論文を通して、古墳時代前期・中期に製作・使用された革綴短甲の時空的位置づけは、ほぼ揺るぎないものになったといえよう。今後は、本論文で示された甲冑研究の枠組みに依拠して、その他の甲冑に対しても同様の研究を進めていくことが望まれる。また、本論文の中で、三角板革綴短甲の型式学的変遷には、技術的な観点からは説明できない部分があり、それらを「意匠性」の観点から説明する必要があると論者は主張する。しかし、この仮説を立証するためには、同時期のさまざまな遺物の検討をさらに進めていく必要がある。このことは、論者自身がよく自覚しており、今後研究を進めていく中で、本論文と同様の手堅い手法で検証されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2016年3月29日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。